

鷺沢萌「眼鏡越しの空」の射程

——「自己責任論」をめぐる——

坂口綾香

一 はじめに

鷺沢萌「眼鏡越しの空」は、雑誌「新潮」二〇〇四年二月号に発表された小説である。これは鷺沢の小説二篇と未完の遺稿で構成された単行本『ビューティフル・ネーム』に収録されている。

川村湊はこのテクストを「越境の物語だ」とし、「これまで、いかにも深刻めかして語られたテーマが、軽く、限りなく軽く書かれていることはいいことだと思う¹⁾」と評している。川村の言う「軽」さは、特に「在日韓国人」（以下〈在日〉と表記する）を描く鷺沢のテクストに対してしばしば指摘される。例えば磯貝治良は、〈在日〉女性の韓国留学を描く鷺沢の小説「君はこの国を好きか」を評して「その方法は、孤独に対する賑わい（主人公を他者との関係に投げ込む）、深刻に対する軽やか²⁾」と述べる。重松清も、「鷺沢さんの作品には、いつも向日性を感じます。いわゆる在日文学的な、梁石日さんの『血と骨』の世界のような蹴散らかしていくようなものじゃなくて、軽やかなんですよ³⁾」と発言している。ただし康潤伊

は「軽やか」といった鷺沢萌評価が「民族の問題を〈文学〉として〈本格〉的に書き切る力量のなさ」と「共鳴⁴⁾」していると否定的見解を述べている。

康は「眼鏡越しの空」を論じる際、同時代の「本名」を呼び名乗る運動」に注目することで「運動によってではなく、先輩への憧れや好意によって名乗り始めることがポジティブに描かれている点に、「眼鏡越しの空」、あるいは鷺沢萌の名前をめぐる作品の評価ポイントがある」（七六頁）ことを見出している。

その一方、「本名」／通名問題の背景に厳然たる事実としてある差別構造を、自己責任論に回収させかねない」（七六頁）という表象上の問題点も指摘している。本稿で後述するように、「自己責任論」という語はテクストが発表された時代に広まりつつあった。このことを踏まえても、康の指摘は示唆に富む。

そこで本稿では登場人物の表象に注目することで、テクストと「自己責任論」との親和性を考える。しかし「自己責任論」の問題の指摘にとどまっていたはテクストの可能性をつかみきれないとするのが、本稿のもう一つの主張である。テクストには、ある特定の集

団に属している人々の名乗りの抑圧が続く状況が書かれている。テキストはこのことに対して、どのような批評性を持つのか。以上の点から「眼鏡越しの空」の射程を検討したい。

二 書きこまれた時代の文脈

「眼鏡越しの空」のあらずじは以下の通りである。「在日三世」の崔奈蘭は、高校の先輩であり同じく「在日三世」の「チュー先輩」こと白春純と十年ぶりに偶然再会する。二人は一緒にビールを飲みながら話をする。

奈蘭は中学・高校の六年間だけ「前川奈緒」という通名を名乗っていた。奈蘭が中学三年生のとき、「民族学校に通う女子生徒が、電車の中で、制服のチマチョゴリを刃物で切られる、という事件」が起る。その際、友人である後藤直美の「あんなの着てるほうが悪い」という発言を聞き、奈蘭は通名を名乗っていることで周囲に自身が韓国人であることを伝えられていないことに罪悪感を覚えるようになる。

高等部上がった奈蘭は二学年上の春純と出会い、その「天性の「カッコよさ」に憧れを抱くようになる。高校三年生のとき、借りようとした本についている図書カードにたったひとり「白春純」の名前を見つけたこと、通名を名乗っている奈蘭はその下に自分の本名を書けなかったことから、大学では本名を名乗ろうと決意する。妹の美蘭に渡された「ドリームズ・カム・トゥルー」のCDに収録されていた曲「眼鏡越しの空」に背中を押され、同級生に対して国

籍と本名の「告白」を始める。

再会した春純と別れた後、奈蘭は小学校の同級生と偶然出会い、家まで車で送ってもらうこととなる。奈蘭らが車内で「眼鏡越しの空」を歌うところで物語は終わる。

テキストには、奈蘭と春純とが十年ぶりに再会した現在の語りと、奈蘭の就学前から大学進学までを回想する語りが交互に登場する。三人称の語りであるが、基本的に奈蘭の視点が採用されている。そのため、形式としては奈蘭の一人称の語りに近い。

ここからは、テキストに書きこまれた時代の文脈について述べる。まず「眼鏡越しの空」というタイトルは、一九八九年にデビューして以来二〇二二年現在も活動しているアーティスト、DREAMS COME TRUEの楽曲「眼鏡越しの空」からとられている⁶⁾。この曲が収録されているアルバムは一九九二年一月一日に発売された。これは発売一週間で売上枚数二〇〇万枚を突破したという記録を持ち⁶⁾、その人気ぶりはテキスト内でも言及されている。このように一九九〇年代に人気を博したアーティストの楽曲が、テキスト内の時代を示している。加えて、この曲の「つよくてきれいな あなたの名前がある」という歌詞は、奈蘭の本名の名乗りに大きな影響を与えている。つまりこの楽曲は、テキストで描かれる「本名」/通名問題⁷⁾や、「ビューティフル・ネーム」という単行本のタイトルとともに、テキストにおける「名前」の問題を浮かび上がらせる一要素だといえる。

一九九〇年代の時代性は、民族学校に通う女子生徒のチマチョゴリが切り裂かれたという事件からも読み取れる。この事件は「一九

七〇年代も終わりに近づいたころに生を受けた」奈蘭が中学三年生のとき、「隣国に存在する「核の恐怖」がさかんに報道されるとい背景の中で起こっている。このことから、テキスト内の事件は一九九四年の実際の事件を下敷きにしてしていると推測される。

本章の最後に、「自己責任論」という語について確認する。吉崎祥司は「自己責任論」を以下のように説明する。

自己責任論は、「社会的責任」と「個人的責任」とを意図的に混同し、支配層にとつての不都合なことをすべてを個人の「自己責任」に解消することで、社会的・公共的責任を放棄し、あるいは隠蔽しようとするものです。⁷⁾

吉崎はこのような「自己責任論」の成立を一九九三年の「経済改革研究会」の中間報告「規制緩和について」に見る。そして「自己責任」という言葉を広めた出来事として、二〇〇四年の「イラク人質事件」⁸⁾を挙げている。さらに一九九〇年代以降に進行した日本経済の立て直しのための競争・規制緩和と、「競争の結果には極力自己責任で対処せよ」というイデオロギーに「自己責任論」の機能を見出すことで、「自己責任論」が「新自由主義的「構造改革」と重なっていることも指摘している。

このような吉崎の議論からは、一九九〇年代と二〇〇〇年代初頭にかけて、政治的・経済的文脈から「自己責任論」という言葉が台頭し始めたことがわかる。この時代は、「眼鏡越しの空」の作中時間であり、かつ鷺沢が旺盛に執筆活動を行っていた時期と重なる。

ここまでのことを踏まえ、以下で具体的な考察に入っていきたい。

三 一人の感覚に寄り添う語

では、「眼鏡越しの空」の登場人物をめぐるどのような表象が、いかに「自己責任論」に通じてしまうのだろうか。

——いいよね、嘘をつかなくてもいい立場のヒトはさ……。
名簿の中に白春純という三文字を見た瞬間に思ったのはそういうようなことで、これはまったく、我がことながら呆れ返つてもも言えない、というほど身勝手な言い草であった。「嘘をつかなければならない立場」に自分を追い込んだのは他ならぬ奈蘭自身なのだ。
(二三八頁)

奈蘭は通名を名乗っているという自分の状態に対して「知らせるべき情報の欠如」ではなく「自分を「嘘つき」として認定」するという態度をとる。このことが「嘘をつかなければならない立場」に自分を追い込んだのは他ならぬ奈蘭自身」という言葉での語りにながっている。

この場面に関して重要なのは、奈蘭が「知らせるべき情報の欠如」に気づいた際、「そんな気持ちのもっとも手前の時点で、自分が韓国人であることを知ったときに周囲がどういう反応を見せるのか皆目見当がつかない、という大きな不安が自らの中に根づいている

ことに、奈蘭は気付かないふりをした」と語られていることであらう。このことに影響しているのは、チマチヨゴリが切られた事件を

きっかけに「あんなの着てるほうが悪い」と考え発言する、あるいはそれに同調する複数の同級生の存在が顕在化したことだと考えられる。このようにテキストには、人が本名を名乗ることを抑圧して通名を名乗ることに向かわせる社会構造として、知識不足を一つの要因とした周囲からの差別の問題が描かれている。

しかし語りにおいてそのこと以上に前景化しているのは、奈蘭自身の「嘘つき」という自己認識である。

次の引用部では、春純の発言とそれに対する奈蘭の衝撃が語られる。

—— 韓国人だからさ。韓国の名前なワケよ。

単なる事実を事実として述べているだけのチュー先輩のその台詞に、奈蘭は一瞬魂を抜かれたようになった。(中略)

—— んー。単語とかで知ってるのはいくつもあるけどね。ペラペラ、とかいうのではないよ。

これもまた、単なる事実の述懐であった。

しかし、その「単なる事実の述懐」は、奈蘭にとつては青天の霹靂だった。その次に奈蘭が感じたのは、当然のことながら「単なる事実の述懐」を聞いてなぜ青天の霹靂のように感じるのか、という自己に対する疑問だったが、それらさまざまの思いとは別の次元で、ほとんど皮膚のレベルで感じたものをごまかすにすれば、以下のようなことになる。

—— ひえー！ カッコいい！

(五二五三頁)

ここでは「単なる事実の述懐」を聞いてなぜ青天の霹靂のように感じるのか」という「疑問」を通して、特定の集団に属している人の名乗りを躊躇わせる日本の社会構造の問題が示唆されている。しかしそのことの問い直しはここでは行われない。代わりに強調されるのは奈蘭が「皮膚のレベルで感じたもの」、すなわち韓国人であるという「単なる事実の述懐」を堂々と実現する春純という個人のことである。

以上のように、テキストにおいて「差別構造」は確かに認識され、書きこまれている。しかし語りはその構造的な問題以上に個人の感覚、特に奈蘭の感覚に寄り添おうとしているのが特徴的である。この部分は、テキストの〈軽やかさ〉や「向日性」とも関連付けられるといえよう。

ただしこのことには、名乗りの抑圧として表れている差別の問題を、名乗らない／名乗れない個人の責任に回収するとともに、社会的・公的責任の隠蔽に手を貸す危うさも指摘できる。

四 対話ができる関係性の構築と持続

前章では特に奈蘭個人の感覚に関わる語りに目を向けたが、テキストには奈蘭以外の人物の感覚もまた描かれている。そしてその感覚には、適切とはいえないものも含まれている。そこで本章では、

時に問題を含む他の人物の日常的感觉に對する奈蘭の振る舞いに注目する。このことから、目の前の個人との關係性の構築と持続⁹⁾を重視するというテクストの特徴を指摘したい。

以下の引用は、「知識の欠如」ゆえに「彼女の中にいわゆる「蔑視」が存在しなかった」という奈蘭の同級生の麻衣子の発言と、それを受けた語りである。

「じゃ、チュー先輩と一緒なんだ!」

麻衣子のこの台詞には、思わず笑ってしまった。

たしかに奈蘭とチュー先輩の国籍は同じだけれど、国籍が同じだからといって奈蘭がチュー先輩のように俊足なわけではなし、テニスがうまいわけでもない。(中略)

「だって、あのチュー先輩と、同じ国のヒトなんでしょ? それって結構、ナオにとつては自慢っぽくない?」

(七五頁)

ここでは「多くの同級生を「ファン」たらしめていたチュー先輩個人の魅力」によって、韓国人であることにポジティブな意味が付与されている。ただし、ここでなされている国籍による人間のカテゴリズは、国籍による差別と構造が類似している。そのためここでの麻衣子の発言をそのまま受け取ることはできない。

ここで注目したいのは、語り手が麻衣子の発言の有効性を保留しつつも「テレビなんかに出ていたりするエライ先生がブラウン管のむこうで言っていることよりも、奈蘭としては感覺的に納得ができ

ること」として受容する奈蘭の姿勢を語っていることである。ここで「エライ先生」と麻衣子とは対置されている。そして前者の発言の(正しさ)よりも、奈蘭が納得できる後者の日常的感觉が重視されている。「知識の欠如」によって特徴づけられている麻衣子という人物は、奈蘭にとってその考え方が正しくないがゆえにわかりあえない存在ではない。「感覺的」な理解を通して關係性を構築し持続させていくべき存在である。

そのような關係性の構築と持続の営みは、奈蘭と直美との対話の場面に顕著である。直美は「感覺として」(在日)に嫌悪感を抱いていた日本人として描かれる。奈蘭から国籍と本名に関する「告白」を聞いたことをきっかけに様々なことを考えたり調べたりして認識を改めていくが、それでも直美は「あんなの着てるほうが悪い」という自分の発言が間違っているとは思えない。そこで直美は奈蘭との対話の場を設け、チマチヨゴリの制服から「日本に對する拒否感みたいなもの」、すなわち「排他性」を感じるということを、「懸念にことばを選びながら」奈蘭に直接表明する。

対話の中で奈蘭は、直美の発言に潜む差别的感覺を「「こういう考え方をする人も存在するのだから」とは思える、という意味では受容できるものであった」、「その考え方は判らないではない」という言葉で一旦受けとめ、その上で自らの意見を説明している。二人は「真摯」にやり取りを行うが、チマチヨゴリの制服から「排他性」を感じる直美と「民族の主張」を見る奈蘭の対話は最後までかみ合わない。

以下の引用は、対話の場面の終盤に奈蘭と直美との間で交わされ

た会話である。

「それはブレイク・イーブンでしょ」

「え？ 何それ？」

ブレイク・イーブンということばの意味が判らなくて問い返すと、直美は「相殺だ」と答えた。

不用意な発言をしたこと、奈蘭の「告白」を聞いて、いろんなことを考えたり調べたりするまでは自分が「何にも知らなかった」こと、それが何も言わずにただ直美を避けていた奈蘭の行為を「相殺」にするのだ、と。

「やられた」と奈蘭は思い、結んだ口の中にあふれた笑いは外に出さないままで——だから奈蘭の頬はぶくりと膨らんだが——、頷いた。

(八九頁)

知識の欠如から差別的発言をして奈蘭を深く傷つけた直美の行為と、何も伝えないまま直美を避けていた奈蘭の行為は、「相殺」される同質のものではありえない。例えば、本名や国籍の名乗りを抑圧する社会構造は奈蘭の行為に大きな影響を与えたはずである。それを「奈蘭の行為」として個人の責任に還元することは、まさに「自己責任論」への回収だといえよう。

しかし引用部からわかるように、奈蘭はそのような直美の発言をも受け入れる。そして二人が共に食事をしようとするところで、この場面の回想が終わる。このことから、奈蘭が直美の適切とはい

えない発言とそれを支える日常的感觉を一旦受け止め、二人の関係性の修復と持続のためのひとまずの落としどころを見つけていることがわかる。

以上のように、このテキストには〈正しさ〉よりも日常的感觉に重きを置いて人と関わる人物が描かれている。このことを、差別を許している社会的責任・公的責任の温存または隠蔽として批判することも可能であろう。しかしここではこの表象が、対話のできる関係性を目の前の個人と構築し、持続させようとする姿勢につながっていることを強調したい。なぜならそれこそがこのテキストから読み取れる、差別に抵抗する方法の一つだからである。

以下の引用は、直美が抱く〈在日〉への「嫌悪」に関する語りである。

直美が「うっとうしい」ということはで表現したものは、一般的には「不快感」と呼ばれる種類の感覺で、それはたとえば目の前にいる奈蘭という「個人」に向けられているものではない。

「個人」に向けられているわけではない「不快感」は、しかし誰かの中で噴出したときに「個人」に対して向けられる。

(八二頁)

この語りを踏まえると、テキストに描かれたチマチヨゴリが切り裂かれた事件は「不快感」が個人に向けられた一例として把握できる。このとき、対話可能な人と人との関係性を重視する人物を描く

ことは、個人への暴力の形をとるヘイトクライムに対する抵抗の一つとして機能するのではないか。

五 現実を変える可能性を想像する

先述のように、テキストには特定の集団に属している人の名乗りが抑圧されている現実や、その背景にある社会構造の問題が描かれている。では登場人物たちはこの現実をどう捉え、語っているのか。本章ではこのことについて論じることで、テキストから読み取れる抵抗の試みをもう一つ明らかにしたい。

まず示すのは、社会人講座の講師をしている奈蘭に対する、春純の発言である。

「やっぱさ、『先生』って呼ばれるような仕事してる韓国人が日本に増えるのって、嬉しいじゃん？」
「……………」

「韓国人だつていうのを理由にして勝手にヤサグれちゃうようなおバカな若者も多いけど、『先生』って呼ばれるような韓国人が増えれば、そういうのも変わってくると思うんだよね、あたし」

(四二頁)

奈蘭は春純との出会いから十年を経て「先生」と呼ばれる立場になった。奈蘭の個人的な変化から春純は、語りの現在における現実を変えていく可能性を想像して語っている。そして奈蘭は春純の語

りに同意するとともにそれを拡張する。

さつきチュー先輩は、「先生」と呼ばれるような仕事をしている韓国人が増えれば、いろいろなことが変わってくる、と言った。それを少し言い換えれば、「カッコいい」韓国人が増えれば、いろいろなことが変わってくる、ということでもあると思う。そうしてチュー先輩は「イチオー」付きではあるが「先生」と呼ばれている奈蘭を評して「えらい」などと言ってくれたけれど、かつて奈蘭は、白春純という人間を見て、まったく同じ思いを抱いたのだ。

(四七頁)

ここで奈蘭は、春純が十年前から「カッコいい」存在だったことを語る。それは、十年前にも現実の変化の兆しがあったことを示すだろう。それと同時に、春純の存在が奈蘭に影響を与えたように、奈蘭もまた誰かに肯定的な影響を与える存在となり得ることが示唆される。

時間の経過によって現実が変えられる可能性を語る部分是他にもある。

十代のころには、自分の中にたたくさんの「ゼッター」が存在する。あたしは「ゼッター」こう思う。あたしは「ゼッター」こういうことはしない。あたしは「ゼッター」誰々のことは好きになれない。

世の中の多様性を知らぬがゆえに、また、経験則の不足のせいで、人間の気持ちというものは分刻みで変貌してしまう可能性を常に孕んでいるものである、という普遍的事実をまだ知らぬがゆえに、それらの「ゼツタイ」がほんとうに「絶対」であるかのように思いこんでしまう。そうした「ゼツタイ」の多くは、ある日、とんでもない軽い出来事であつという間に変わってしまうこともあるのだ、ということ、十代の女の子は知らない。

(五七―五八頁)

ここでの「ゼツタイ」感」は「十代のころ」に特有のものとして年齢と結びつけて語られている。これによつて、時間の経過による変化の可能性が明確に打ち出される。

また、奈蘭の「ゼツタイ」感」は図書室での出来事によつて揺らぐ。このことから、「ゼツタイ」と言われるような強固な価値観の変わりやすさが、奈蘭個人の変化の経験から語られていることがわかる。

次に、再び奈蘭と直美のやり取りを取り上げる。

直美は、奈蘭が大学入學と同時に本名を名乗ると告げた際に「これからタイヘンだね」という言葉をかけた。しかし先述の対話の後で直美は自らの発言を振り返り、「あの台詞は、すつこいの外的なモノだった、ということだけは判った」と奈蘭に伝える。しかしそれに対して語られるのは、奈蘭にとつて「実際に起こったことを言えば、「これからタイヘンだね」という台詞は決定的外れではなかつ

た」ということである。ここからは、直美が唯一理解できたと考えていたことですら奈蘭の実感とはそぐわないもの、いわば「外的」なものであつたことがわかる。

しかしここでの直美の言葉は、直美の意図しない形で奈蘭にポジティブな想像のきっかけを与える。

だが、今でも奈蘭は、直美のそのことを懐の奥深くにしまひこんでいる。そうしてときどき思い出しては、耳の中で直美の声を再生させる。あの台詞は、すつこいの外的なモノだった。それがほんとうに「外的なモノ」になるのがいつの日のことかは判らないが、なにせ奈蘭にとっては貴重なことばだ。

(八八―八九頁)

このとき奈蘭は、通名ではなく本名を名乗ることで「タイヘン」な思いをしなない世界を想像している。過去の自らの発言を改めた直美の言葉は、奈蘭に今まさにある現実に変化し得るということをやメージさせるきっかけとなつている。

これまで見てきたのは、いずれも極めて個人的なレベルの変化である。しかし「眼鏡越しの空」の登場人物たちはそれらをきっかけに、名乗りが抑圧される現実の変化の可能性を想像している。

ここで、本章で確認した表象と「自己責任論」との関わりを考えておきたい。以上で示してきた個人のレベルの変化を支えているのは、各人の能力や努力、あるいは偶然だといえよう。その点で、ここにも「自己責任論」に掘め取られる危険性は指摘できる。名乗り

をめぐる抑圧の問題への対応は、個人のみならずむしろ社会的・公的責任のもとで取り組まれるべきことである。

ただし、本稿で度々指摘してきたこのような危うさをも読みにとり入れると、「眼鏡越しの空」には「自己責任論」による抑圧構造を深く内面化した登場人物が描かれているという解釈が可能になるのではない。そして社会的・公的責任のもとでの取り組みによる変化ではなく、個人の責任のもとでの変化に懸げざるを得ないというこのような描き方からは、「自己責任論」という言葉が広まり始めた時代における登場人物の切迫した状況や思いが読みとれる。

さらに考えたいのは、これまで何度も言及してきた、民族学校の生徒のチマチヨゴリが切り裂かれた事件についてである。師岡康子は「一九八九年のパチンコ疑惑、九四年の核疑惑、九八年のテポドン騒動」、そして「眼鏡越しの空」が発表される二年前の二〇〇二年の拉致問題などのたびに、チマチヨゴリが切り裂かれる事件も含めたヘイトクライムが繰り返されていることを指摘している。¹⁰この閉塞した社会状況を踏まえると、現実を変える可能性を身近な個人の変化のレベルから辛うじて見出そうとする登場人物の、追いつめられた状況が見えてくる。このような時代の文脈の中で登場人物の描写を捉えることでも、名乗りを抑圧する差別の問題に対抗しようとする、「眼鏡越しの空」の側面が明らかになる。

六 おわりに

本稿では、「自己責任論」に搦め取られる危うさに注意を払いなが

ら「眼鏡越しの空」の読みの可能性を考えた。具体的にはテキストの登場人物の表象に注目することで、語りのレベルでも登場人物のレベルでも、時に無自覚に問題をはらんだ個人の日常的感觉に寄り添っていることと、対話ができる関係性を目の前の個人と構築し、持続させようとする人物が描かれていることを読み取った。さらに、身近な個人の変化に触発され、現実を変える可能性を想像して語っている登場人物が書かれていることを指摘し、そのことが持つ批評性についても論じた。今後の課題としては本稿での分析を、このテキストを貫く名前をめぐる問題系とともに考察することが挙げられる。

鷺沢のテキストがはらむ危うさを批判的に検討した上で、そこに込められた抵抗の糸口を拾い上げる。今鷺沢のテキストを読み直すことの意義は、ここにあるのではないか。

注

- (1) 『文芸時評1993』2007 水声社、二〇〇八、四四二―四四三頁
- (2) 磯貝治良『在日』文学論 新幹社、二〇〇四、二七七頁
- (3) 鷺沢萌・重松清「重松清インタビュー」による鷺沢萌論 誰かの役に立ちたい——関係性の文学」〔鷺沢萌―私の話〕スベシャル★何があってもダイジョープ1968↓2003 河出書房新社『文芸』四二二、二〇〇三・二、四〇頁
- (4) 康潤伊「名前をめぐるアンビヴァレンスと他者性―鷺沢萌「眼鏡越しの空」を中心に―」白百合女子大学国語国文学会『国

文白百合』四九、二〇一八・三、七〇頁

- (5) 鷺沢萌公式サイト「Office Meimei」には「鷺沢本人によるレビュー」として、以下のようにある。「タイトルと歌詞の引用を快く承諾してくださった吉田美和さんに最高級の感謝を述べるとともに、この小説は、吉田美和さんの作った歌「眼鏡越しの空」がなければこの世に生まれなかったであろう、ということをお断言します。」

(http://meimei.lacocan.jp/review/pre_megane.htm 最終閲覧日は二〇二二年一月十七日)

- (6) 『オフィシャル・スコア・ブック ドリ本』DREAMS COME TRUE大全集（完全保存版）『ドレミ楽譜出版社、二〇〇七、五一四頁

- (7) 吉崎祥司『自己責任論』をのりこえる——連帯と「社会的責任」の哲学』学習の友社、二〇一四、一七頁

- (8) 「イラク人質事件」とは二〇〇四年四月七日、イラクの武装勢力が日本人三人を拉致して人質とした事件を指す。武装グループが人質解放の条件としてイラクに駐留していた自衛隊の撤退を要求したことで、人質になった三人とその家族が「自己責任」という言葉で非難された。

- (9) ここである「持続」は、全く同じ関係性を保ち、再生産し続けることではない。時間の経過とともに、あるいはその場その場のやり取りの中で形を変えつつも、つながりを断たずにいることである。

- (10) 師岡康子『ヘイト・スピーチとは何か』岩波書店、二〇一三、

「はじめに」V-VI

※本文引用は鷺沢萌「眼鏡越しの空」（鷺沢萌『ビューティフル・ネーム』新潮社、二〇〇四）によった。

付記

本稿は、国語教育カフェ（二〇二二年七月二三日 於広島大学）にて発表した内容をもとに、まとめ直したものです。

（広島大学大学院人間社会科学研究所博士課程前期一年）